

4月、桜満開の京都で「フィジカルアセスメント研修会」が開催されました。この研修会は、「フィジカルアセスメントの教え方がわからない」「自分の技術に自身が持てない」、そんな教員や訪問看護師を対象にして、アウトホスピタルケア研究会が主催したものです。

講師は山内豊明先生(名古屋大学医学部基礎看護学教授)。キーワードは、「集中的」、「少人数」、「実践」。教え方、学び方に、役立つヒントがたくさんありそうなので、紹介します。

●ひとつのテーマを集中して学ぶ

研修会は、毎週土日、3週連続で開催されました。これは、米国の継続教育で採用されている「集中研修→臨床に戻って実践→集中研修→実践」をくり返す方式を取り入れたもの。臨床での実践が研修で学んだことを復習する場となるため、研修を受ける数日だけでなく、

ほぼ1か月間、集中することで技術のステップアップが狙える方法です。

研修会では、特に重要な「呼吸」「循環」「神経・運動」にテーマを絞っています。その中でも、たとえば「呼吸」であれば、“呼吸音の正常と異常を聴き分ける”“異常があれば、異常呼吸音の性質を判断し、正しく表現する”ことにフォーカスを絞り、その知識と技術を確実に身につけることに集中します。

すべてを網羅して教えようとするのではなく、どこかにフォーカスをあてて、きっちりと教える。フィジカルアセスメントを効果的に教えるための、1つの方法です。

●少人数でみっちり学ぶ

30名という少人数で行われるのも、この研修会の特徴の一つです。

打診の実習では、「きちんと音が出ているか」「音の変化がわかるか」の項目を、一人ひとり確認します(写真1)。最初はうまくできなかった人もコツをつかみ、次々と「合格」をもらいました。

こんな丁寧な教え方は少人数だからこそできること。人数が多い

場合には、コツをうまく伝え、学生同士がお互いの身体を使って技術を身につけていくことができそうです。

●実践をくり返す

研修会では、座学よりも実習に長い時間を使います。前述の打診の技術のほか、数台の医学教育用シミュレータ(京都科学提供)を活用し、呼吸音の聴診をくり返し行います。

しっかりと呼吸音のパターンを覚えていれば、異常呼吸音の聴き分けも難しくありません。

ただしシミュレータの音は、1つの典型例。学生同士で、お互いの呼吸音を聴いておくことも必要です。

●フィジコちゃんがやってきた!

今回の研修では、発売開始となったばかりの医学教育用シミュレータ「Physico」(フィジコ)が登場しました(写真2)。フィジカルアセスメントを総合的に学ぶためのシミュレータとして開発されたモデルで、心音、呼吸音、腸音の聴診のほか、脈拍、心電図、瞳孔反射、血圧測定の手技手順とみかたを学習できます。そのほか、特定の患者シミュレーション(心筋梗塞、肺線維症など)が可能で、患者の状態を判断するトレーニングもできます。(s)

【問い合わせ先】

NPO法人 アウトホスピタルケア研究会

TEL: 0269-24-0204

<http://www.enishi-web.jp/kain.htm>

株式会社 京都科学

TEL: 075-605-2510

<http://www.kyotokagaku.jp/>

このコーナーでは、皆様からの声をご紹介します。学会・研究会等に参加したご感想やご意見をお待ちしています。



←写真1 呼吸音には心音も混じっているので集中して聴かないと追いつかない

↓写真2 フィジコの名前の由来は、アニメ「ルパン三世」の不二子から

